慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	Walter Paterの文体 : The Renaissanceの初・再版本をめぐって
Sub Title	The style of Walter Pater : A comparison of the first and second editions of The Renaissance
Author	武田, 勝彦(Takeda, Katsuhiko)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1963
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.16, (1963. 10) ,p.154(25)- 166(13)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00160001-0166

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

Walter Pater の文体

——*The Renaissance* の初・再版本をめぐって——

武　田　勝　彦

§ 1. Pater の文体に対する評価

Mona Lisa

She is older than the rocks among which she sits;
Like the Vampire,
She has been dead many times,
And learned the secrets of the grave;
And has been a diver in deep seas,
And keeps their fallen day about her;
And trafficked for strange webs with Eastern merchants;
And, as Leda,
Was the mother of Helen of Troy,
And, as St. Anne,
Was the mother of Mary;
And all this has been to her but as the sound of lyres and flutes,
And lives
Only in the delicacy
With which it has moulded the changing lineaments,
And tinged the eyelids and the hands.

この散文詩は Yeats が編集した *The Oxford Book of Modern Verse*, 1892—1935 の巻頭を飾っている。しかし，これは元来散文詩として書かれたものではなかった。Pater が1869年の秋に *Notes on Leonardo Da Vinci* と題して *Fortnightly Review* に寄稿した論文の一節である。それにもかゝわらず，Yeats が一字一句の修正も施さず散文詩に

書き改め（2行目の Vampire は原文では vampire となっている），しかも近代詩集の巻頭においたのはなぜであろうか。Yeats はこの詩集の序文の中で，世紀末から20世紀初葉の新しい世代の人々は旧世代の人々に反抗を示していたが，Pater だけは全く無条件で賞賛の的となっていたと述べている。これは Pater と新しい世代の人々の間に共通の場が存在していたことを示唆するわけであるが，果して事実は Yeats の云う通りであったのか。また，彼のいわゆる "the new generation" はいかなる範囲に限定されるものであろうか。さらに，Pater はどのような点で賞賛をかち得ていたのか。

これらの問題を最も具体的に展開し，洞察力に富む考察を公にしているのが Eliot である。彼のまとまった Pater 論と云うべき *Arnold and Pater* の中で，彼は Pater の後に出現した一流の人で *The Renaissance* の影響を受けた人は一人もいないとか[1]，Pater は Carlyle, Ruskin, Arnold と同種の人間として，その少し下に置かれるべきであると[2]断言しているが，これは思想的な問題において述べられた批評である。Eliot が文体に重点をおいて論じた作品の場合は，かなり異った態度が見られる。N.R.F.誌の1922年12月号に掲載した *Lettre d'angleterre : Le style dans la prose anglaise contemporaine* によると，Pater の散文は19世紀の最後の10年間と20世紀の最初の10年間を支配した model であり，Bradley, Wilde, Yeats にその影響が発見されると Eliot は云う。してみると，Yeats の序文の解説も彼の独断でないことが明瞭になって来る。しかし，Eliot は Pater-cult の終末を明確に指摘する。即ち，それが Joyce の *Ulysses* である。この小説は1922年に書かれたが，Joyce の前作 *A Portrait of the Artist as a Young Man* (1916) と文体上全く異質なものと Eliot は考えている。それは *Portrait* が Pater の文体の影響を深く受けているが，それに反し，*Ulysses* には全くその跡が見られないと云うことに因るものである。Eliot は Joyce を新しい文学運動の革命のにない手と信じている[3]。この態度は，同じ年に書かれた *Le roman anglais contemporain* の所説とも一致する。

これらの考察から，われわれは少なくとも Pater の散文が2つの世紀の交替の期を中点とし，その前後15・6年の間は英国の散文に大きな影響を及ぼしたことをほぼ確信することができる。次に，Pater の散文を実証的に調査する前に，それに対して寄せられた幾つかの批評を眺めておこう。

Pater の死んだ1894年には Lionel Johnson と，Edmund Gosse がわが国で云う追悼論文に当るものを書いているが，両者とも Pater の散文を高く評価している。Johnson

は Pater の書物の一頁にも些細な不注意の痕跡が見られず，各語を適切な場所に配置していると述べている[4]。一方，Gosse も Pater の散文の冗長さや繊細さの欠点を認めながらも，その美的特質を高く評価している[5]。このような同時代人乃至は後継者達の批評は，これまでに多くの研究者達の指摘したように，Wilde, Moore, Symons, Saintsbury などに共通なものである。これらの一群の中でも Symons の評価は最も高い。彼は Pater の散文を完璧なものと賞賛し，*The Renaissance* を英国散文中の最も美しい散文であるとまで云う[6]。

しかし，これらの賛辞のみに耳を傾けていることは許されない。Hearn は Victoria 朝の散文家の最もすぐれた4人を Macaulay, Carlyle, Ruskin, Froude とし，Pater に対しては rhythm の巧妙さを認めるに過ぎない[7]。Maugham は色々な作品の中で，Pater の散文に言及しているが，相当手厳しい言葉で Pater を非難している。Pater の文体に感服する人があるとは不思議であるとか[8]，Pater の文体は貧血症であるとか[9]云っている。最近の *Points of View* では *Æthetic Poetry* の文章は無味乾燥で，何らの感動もなく，ただ骨を折って書かれたものである[10]とまで極言している。

このような極端な賛否両論を読むと，われわれはどのような解決をしたらよいのかと迷ってしまう。文体論を理論的に展開している Pater や Lucas などはどうなるであろうか。前者は Pater の文体を個性的なものと見るが，そこには美があることを[11]指摘する。後者も韻律の美を取り上げている[12]。これらが妥当な批評なのかもしれない。しかし，いずれにしても，中庸なるが故に，それを妥当なものとすることは常識的な見解でしかない。毀誉褒貶のいずれを正とするかは，この小論のよくするところではないが，残された問題に対する解答作成の一資料を展開してみたいと思う。

参 考 文 献

(1) T.S. Eliot *Arnold and Pater* (研究社版 Essays) p. 224.
(2) ibid. p. 225.
(3) T.S. Eliot *Le style dans la prose anglaise contemporaine* N.R.F. Déc. 1922. p. 754.
(4) L. Johnson *The Work of Mr. Pater* Fortnightly Review 1894. Sept. p. 355.
(5) E. Gosse *Walter Pater, A Portrait* Contemporary Review 1894. Dec. p. 807.
(6) A. Symons *A Study of Walter Pater* p. 2.
(7) L. Hearn *A History of English Literature* p. 701. & p. 729.
(8) W.S. Maugham *The Summing Up* (N.A.L) p. 57.
(9) ibid p. 19.
(10) W.S. Maugham *Points of View* (Heinemann) p. 106.
(11) H. Read *English Prose Style* (Beacon) p. 182-3.
(12) F.L. Lucas *Style* (O.U.P.) p. 236.

§ 2. *The Renaissance* の初・再版本の改訂をめぐって

Pierre Guiraud は *La Stylistique* の中で，stylistique comparée「比較文体論」を提唱している。彼によれば，文体論それ自体が比較的方法によるものであると云う。そして，さらに詳しく云うと「比較文体論」というものを考えることができるが，その場合は，主眼とするところは源泉と影響の研究であると述べている。[1] この文体論は Littérature comparée が一国と他国の文学的影響を対象とするのとは異って，一国における作家，作品の影響関係あるいは同一作家の数種の版の相互関係も研究の対象としている。特に Pater の *The Renaissance* の場合は後に述べる理由により，「比較文体論」上の興味深い材料を提供する。

		Preface	Two Early French Stories	Pico Della Mirandula	Sandro Botticelli	Luca Della Robbia	The Poetry of Michelangelo	Leonardo Da Vinci	Joachim Du Bellay	Winckelmann	計
A	1							1		2	**3**
	2						1	5		6	**12**
	3		1						1	6	**8**
	4						1		1	1	**3**
	5									1	**1**
小計			**1**				**2**	**6**	**2**	**16**	**27**
B	1	9	7	16	5	23	25	18	19	53	**175**
	2	2	2	0	0	3	1	3	1	5	**17**
	3	4	2	3	0	4	7	15	12	29	**76**
	4	0	0	3	0	0	4	3	2	12	**24**
小計		**15**	**11**	**22**	**5**	**30**	**37**	**39**	**34**	**99**	**292**
C	1	7	28	17	8	7	30	12	24	69	**202**
	2	20	61	80	24	33	93	68	54	194	**627**
	3	2	4	12	2	3	2	2	5	7	**39**
小計		**29**	**93**	**109**	**34**	**43**	**125**	**82**	**83**	**270**	**868**
D	1	0	5	7	5	0	8	42	3	11	**81**
	2									2	**2**
	3	6	13	15	10	7	30	53	29	52	**215**
小計		**6**	**18**	**22**	**15**	**7**	**38**	**95**	**32**	**65**	**298**
総計		**50**	**123**	**153**	**54**	**80**	**202**	**222**	**151**	**450**	**1485**

Pater の *Studies in the History of the Renaissance* は1873年に初版が公にされた。再版は4年おくれて1877年に，*The Renaissance, studies in art and poetry* と改題して出版された。両者の相違は "Aucassin and Nicolette" が "Two Early French Stories" と改題され，その題名からもほぼ推察のつく通り，"Amis and Amile" の挿話が追加されたことと，"Conclusion" が全面的に削除されたことである。しかし，他の論文中にもかなりの改訂の跡が見られる。これを次の項目に分類して検討してみよう。

A. Alterations of Sentences——(1) Change of sentences (2) Addition of sentences (3) Omission of sentences (4) Combination of sentences (5) Separation of sentences

B. Alterations of Word-groups or Words——(1) Change of word-groups or words (2) Change in the word order (3) Addition of word-groups or words (4) Omission of word-groups or words

C. Alterations of Punctuations——(1) Change of punctuations (2) Addition of punctuations (3) Omission of punctuations

D. Miscellaneous——(1) Change of spelling (2) Elucidation of foreign languages (3) Others

この統計には再版での "Conclusion" の削除，脚註の省略，及び "Two Early French Stories"（初版では "Aucassin and Nicolette"）の "Amis and Amile" の挿話の追加などは含まれていない。

この統計から何ものかを得，結論を得るために，一般的な解説と個別的な解説をしておかなくてはならぬ。往々にして，文学研究の場合に数字に対する不信や不安，そして疑惑はつきものである。時にはここで示したような統計については，「決して，love という単語が幾つ使われたかという愚劣な調査」[2]とまで非難されることも予測される。統計というものは一般的傾向を導くものであって，個々の事物を個性的に説明するものではない。統計における実数は大数の法則の中において生きているものである。文学の分野では経済学や社会学のそれにおけるほど大数の法則を適応する場合が少ないことは確かである。しかし，それ故に，統計的処理を拒否することは妥当でない。ある意味では，むしろ，小数例統計の具体的な場を統計学者に提供し得る可能性も見出される。要は，一般的傾向を知ることであって，実数にこだわってはならない。だから，ある一節の love という語を数えることは無意味であっても，統計学的に証明された範囲内で

love という語を数えることは意味がある。したがって，この表の数値は本稿の研究の対象と範囲を限定することはできるが，個々の現象を説明することはできない[3]。

次に，この表の項目について簡単にふれておかなければならない。〔A〕Sentences, 〔B〕Word-groups or Words, 〔C〕Punctuations, 〔D〕Miscellaneous の中，〔A〕と〔B〕が最も問題にされるであろう。そして，具体的な改訂箇所を〔A〕なり〔B〕なりに数え入れることについて，統計者自らが苦悩したことを告白せねばならない。ここでは，sentence というものを文章構造の単位として扱わず，意識の単位として扱った。たとえば，and で結ばれている，いわゆる co-ordinate clause の一方が改変されている場合は〔A〕の（1）に数えたわけである。また，*It is because-clause.* のような場合，*It* が *This* なり，*That* に改変されていても，それは〔A〕の（1）ではなく，〔B〕の（1）に数え，because-clause 中の改変（word だけの場合は別として）は〔A〕の（1）に数えてある。〔B〕の Word-groups についても，この術語の創始者 Sweet に忠実なだけでなく，a=x+y や，b+c=x+y+z（a, b, c はそれぞれ初版のある一語を，x, y, z は再版のある一語を示す）というような改変もこの項に入っている。また，次のような例は，文法上 sentence の追加とは云えないであろうが，〔A〕の（2）に入れる。

"Of this spirit Aucassin and Nicolette contains perhaps the most famous expression; it is the answer Aucassin makes when he is threatened with the pains of hell, if he makes Nicolette his mistress."[2]

初版はここで終わるが，再版ではさらにこの後に semi-colon が置かれ，

"a passage in which that note of rebellion is too strident for me to translate it here, though it has its more subdued echoes in our English Chaucer."[3]

と続いている。この追加部分は，たしかに文法上完全な sentence ではないが，意識の単位としては充分に sentence とみなし得る。

次に，この表から全体的にどういうことが推測できるかを考えてみよう。数量的には〔C〕が最も大であり，全体の58%を占める。しかも，その中で Addition の項が圧倒的に多いが，これは Pater が文意を明確にするために，かなり comma を使用しているからである。と云うことは，また一面 Pater の sentence が比較的長文が多いと云うことにもなろう。これは工藤好美氏が Pater の文章の連続と断絶とのさまざまな関係，速度の調節と間合（マアイ）のとりかたが，その入念な punctuation にあらわれる（以下略）[4] と指

摘されていることと一致する。したがって，Pater が初版から再版への途上において punctuation の使用により，これらの技法を一層発展させたと云えよう。

次に〔B〕の Word-groups or Words の改変箇所は，数字の上では20%であるが，意味の改変に及ぼした影響という点では注目に値いするものである。しかも，この中で，（1）の Change の小項目がこの大項目の60%を占めていることは，Pater の文体観の一つが Flaubert の影響の下に成立し，語の選択に彼が非常な注意を払っていたことの証明にもなる。（このことについては次節に詳述する）

〔A〕の Sentence は全体の2%にすぎないが，この場合には統計の持つ数字の問題がある。sentence が一つ変っても，word が一つ変っても，この統計では〔A〕の（1）と〔B〕の（1）の数量的表示は1である。しかし内容上でははるかに大きな差があるわけである。しかも，この統計では "Aucassin and Nicolette" における約11頁の増加と，"Conclusion" における約6頁の減少を計算に入れていない。これをもし無雑作に〔A〕の（2）と（3）に sentences の数だけ加えるとすれば，〔A〕は約150という数値を与えられるであろう。しかし，それは純粋に内容の問題で文体の対象からは除外されるべきであろう。そこで，この2%，27箇所が何を意味するかだけを考えることが許される。この27を論文別にみると "Winckelmann" の16と "LeonardoDa Vinci" の6が特に目立つ。初版における各論文の成立年代，もしくは初出雑誌発表年代を見ると，この2個はそれぞれ1869年と1867年となっている。（参考までにあげれば，再版で削除した "Conclusion" は1868年である）してみると，比較的若い時に書いた作品には Pater 自身が意に充たないものがあったと見ることができよう。これはさらに，三版本との対比研究，及び初出雑誌との対比研究によって，結論が得られよう。

参 考 文 献

（1） P. Guiraud *La Stylistique* P. 103-4.
（2） 佐渡谷重信「アメリカ作家の作品とスタイル」 P. 13.
（3） 文体論において統計を重視せねばならぬことと，両者の必然的関係について Guiraud は *La Stylistique* の中で，"Stylistique et Statistique" と題する項目を設けて解説している.
（4） W. Pater *The Renaissance*（1 st Edition）P. 16.
（5） W. Pater *The Renaissance*（2 nd Edition）P. 28.
（6） 工藤好美「Walter Pater の文体」英語青年 1954年10月号，P. 517.

§ 3. Pater の Style について

Pater の *Style* は1888年12月の *Fortnightly Review* に公表された。この論文は彼の

文体に関する理念の決算報告書であると共に，行間に潜在されたものまでも汲み取って行くと，彼の文体論の借方と貸方が浮き彫りにされて来る。彼は *The Renaissance* の初版において "Joachim du Bellay" 論を書き，*La Deffense et Illustration de la langue Françoyse* の影響を深く受けていた。Bellay の情熱的なフランス語への愛を，Pater は終生の間，彼らしい態度で受け止め，彼の文体論にその理想を具体化させようと試みていた。即ち，Pater 自ら引用している Bellay の一句，*parfait en toute élégance et vénusté de paroles*——言葉としての完全な典雅さと優美さ[1] がその骨子となっている。では言葉の典雅さなり，優美さとは何であるのか。この問に答えるには，もう少し廻り道をせねばならない。

Pater は1877年に *The School of Giorgione* を公にした。（この作品をなぜ *The Renaissance* の再版には入れず，三版に至って追加したかは興味深いテーマであるがここでは省略せざるを得ないが，一応問題だけを提起しておく。）この中で，彼は芸術における形式と内容の統一について非常な苦心を払っているが，究極においては形式重視に足を引っ張られたのではないかと思う。その中の詩論で，Pater は言葉について次のような興味深いことを述べている。即ち，詩は，まずわれわれの知性に呼びかける言葉で書かれていると見る[2]。「知性に呼びかける」と云う箇所に特に注意しなくてはならない。しかし，彼は，詩の中で抒情詩が最高級のものであると云う。なぜならば，抒情詩においてはその内容になにものかを失わせることなく，それを形式から引き離すことが困難であるからと説明する[3]。この思想こそ，*Style* において，文学者は学者であらねばならぬと[4]強調する態度を生み出したものにほかならない。さらにこれを延長して，Maupassant の *Etude sur le roman*（*Pierre et Jean* の序文）における Flaubert の Maupassant に与えた忠告との関連において眺めると，Pater がいかに言語における意味上の最少構成単位である単語に大きな関心を払うに至ったかは明瞭となるであろう。

次に，Pater の *Style* において注意すべきことは文章構成における統一の問題である。それは作品の構成において，最初にあって，最後を予見し，それを見失うことなく，あらゆる部分が他の残りの部分を意識し，最後の文章が，おとろえることのない力で，最初の文章を説明し，正当化する建築的な構想[5]と云う理想によって明瞭となる。田部重治氏はこれを Poe の *The Philosophy of Composition* の影響として新説を提起されている[6]。しかし，Poe と共に Buffon の *Discours sur le style* の影響をもあわせて提起したい。これは Pater が彼の有名な言葉 "Le style c'est l'homme même." を引用し

ているというような思いつきではなく，Pater が偉大なる批評家として尊敬し，その影響を強くうけた Sainte-Beuve の *Qu'est-ce Qu'un Classique?*——Lundi 21 octobre 1850——における Buffon の文体論に対する批評と一致するからである。Pater が Saint-Beuve にいかに私淑し，その影響をうけていたかは彼の *The Renaissance* の "Preface" や *Appreciations* の "Postscript" を見ても明らかである[7]。

本節の最初に，Pater は形式と内容の統一を目標としながら，*The School of Giorgione* 執筆の頃には，形式に足を引っ張られたと述べたが，この *Style* においては，彼は内容重視に傾斜しかかったと云えるのではなかろうか。それは Pater が散文の使命を内容伝達にあると考え，散文の美は言語そのものの美でなく，内容の正確な表現にあると考えているからである。

Pater は上述の目的達成のために無用の装飾を除去し，ひきしまった表現をすべきであると述べているが，果して，彼自身それを達成し得たかどうかは疑わしい。その理由は，独断的になるかもしれないが，Pater の背後に Stendhal の文体論があったからではないかと思われる。それは，J.M. Murry も *A Problem of Style* の中で，幾度も引用している次のような内容のものである。≪Le style est ceci: Ajouter à une pensée donnée toutes les circonstances propres à produire tout l'effet que doit produire cette pensée≫[8]したがって，Pater は無用の装飾の除去を心がけながらも，与えられた一つの思想に，彼が適切と思ったすべての状況を付加しようとしたのではなかろうか。そのために，彼の文章が非常に長いものになってしまったのではないかと思う。除去と付加——この二つの相反する要素も統一させようと試みたところに Pater の本質が潜んでいる。このことを Read は次のように述べているが，これこそ Pater 彼自身の文体の特質を要約したものと云えよう。

「Pater の文体は明確に彼の独特なものである。それには個性があり，美があるが，われわれはかかる外観上の統一は心の内部の統一から生じたに違いないと思う。」[9]

参 考 文 献

(1) W. Pater *The Renaissance* (3 rd. Edition) p. 164.
(2) ibid. p. 137.
(3) ibid. p. 137.
(4) W. Pater *Appreciations.* p. 8.
(5) ibid. p. 20.
(6) 田部重治「ペーターの芸術批評(六)」白山英文学 Vol. 7. p. 4.
(7) 拙稿「ペイタアの『浪漫主義』とその先行文学としてのフランス浪漫派の文学」比較文学

Vol. 5. p. 44
(8) J.M. Murry *The Problem of Style* p. 72.
(9) H. Read *English Prose Style* (Beacon) p. 182-3.

§ 4. 改訂の意義

われわれは *The Renaissance* の改訂の数量的な概観と Pater の *Style* の大要を眺めてきた。しかし，まだ改訂の本質に立ち入っていない。この本質を解明するためには，初版執筆以降における Pater 自身の研究範囲，読書の系譜などが詳細に検討されなくてはならない。さらに，この間における英文学の変遷と，世界文学の発展も考慮されるべきであろう。そして，*The Renaissance* に対する諸家の批評も充分に参照しなくてはならない。これらの点については，T. Wright や A.C. Benson や E. Thomas の Pater 伝などに譲り，結論だけを述べることに止めたいと思う。

改訂の主旨を思想的乃至は内容上より見ると，宗教上の問題に関する改訂が多い—と結論を下すことができる。次に，言語的見地より見ると，次の2点に要約し得る。

1. German 語族の単語を Latin 語族のそれに変更している。
2. 句読点を豊富にし，文意を正確にする試みが顕著である。

第一の思想上の問題であるが，これは最も重要な問題とみなし得よう。何故なれば，Eliot が Pater を攻撃した時も，その焦点は宗教にあったからである。Eliot は

"The degradation of philosophy and religion, skilfully initiated by Arnold, is competently continued by Pater."(1)

と断言し，*The Renaissance* の初版の "Conclusion" の次の箇所を引用している。

"The service of philosophy and of religion and culture as well,. to the human spirit is to startle it into a sharp and eager observation."(2)

Eliot は初版を引用したことを明記しているが，この個所は三版では次のように修正されている。

"The service of philosophy, of speculative culture, towards the human spirit is to rouse, to startle it to a life of constant and eager observation."(3)

即ち，Pater は religion という語を引っ込めて，speculative culture としている。この背後にわれわれは Pater の真意が何処にあるかを汲み取らねばならない。Eliot の攻撃も初版によって Pater を理解したとすれば，ある程度，無理のないことがわかる。Eliot のこの態度は果して正しいであろうか。原著者が改訂し，その改訂の主旨まで付

してあるのに，それを参照しなかったことは Eliot の手落ちであった。この問題を提起したのは Eliot に対し非難を浴びせるためではない。Pater の *The Renaissance* の改訂においては宗教問題がその中核となることを指摘し，それを明瞭にするためである。それでは，初・再版本を通してどのような改訂，削除の跡があるのか。これをすべて，展開することができないのはまことに残念なことであるが，次の如く要約することができる。

Pater の宗教観——キリスト教観——には Chateaubriand の *Le Génie du christianisme* から受けた美的な要素と，Renan の *Histoire des origines du christianisme* から受けた科学的な実証的な要素が含まれている。そして，さらに Arnold の影響の下で，Hellenism と Hebraism とを統合しようとしていることを見逃してはならない。*The Renaissance* の初・再版そして三版への変遷の過程における Pater の宗教観の変遷は，もし大胆に，そして私見を交えて云うならば，それは Chateaubriand から Renan への移行であると結論を下し得る。

また，Pater は神経質なほどに，religion とか moral と云う語を削除あるいは改変している。即ち，"Other religious, moral, political interests……"(4) と云うような箇所も "Other interests, practical or intellectual……"(5) と改変している。これは，Pater がいかに些細な点まで，意を用いていたかを示すものであると共に，彼の宗教観，哲学観を探求する上で重要な問題となるであろう。また，これらの改訂や削除が "Leonardo Da Vinci" と "Winckelmann" に集中されていることに注目しておかねばならない。

次に philology の面から検討を加えてみたいと思う。特色の一つとして German 語族の words が Latin 語族のそれらへと置換されてゆくことを既にあげたが，これはB項（1）の Change of phrases and words の 175 の中，a と the の相互置換，is lying を lies と変更するなどの例を除いた約 100 について調査した結果，German 語族の Latin 語族への置換と，Latin 語族の German 語族への置換を対比すると 4 対 1 となり，圧倒的に German 語族の Latin 語族への置換が多い。この原因の最たるものは Pater がフランス文学への傾斜を示したことによるものと考えられる。また論文別に見ると，その成立が比較的初期になされたものに多い。例えば，"Winckelmann" は Goethe の名著 *Winckelmann und sein Jahrhundert.*（1804 年）を参照し，この影響の下に書かれたものだが，この場合などは特にそれが著しい。思うに，初版の執筆時には原文の German 語の影響が強かったが，それが再思によって吟味されたことによって，Pater の趣味が

表出して来たと見るのが妥当であろう。この具体的例を全部あげることはここでは許されないので，二・三の例を示して，その一端を知ることに止めよう。*seek* (G. suchen) → *search* (F. chercher), *luck* (G. Glück, Du. luk, geluk) → *fortune* (F.L. fortūna), *give* (G. geben) → *convey* (F. conveyer), *rough* (G. rauch, Du. ruig) → *rude* (L. rud) etc. しかしこれによって，Pater の vocabulary が，Latin-and-French loan-words に偏すると見ることは早計である。要は Pater が，日常必須の平俗な語を避け，高踏的な語を用いようとした傾向があると結論を下す方が妥当である。

次に punctuations の項であるが，これは増加の一途を辿っている。その主たる理由は comma によって，意味を明確にしようとする試みが多いことを指摘し得る。それにしても，Pater の sentence が比較的長く，comma や semi-colon などを大いに要求する必然的な理由があったことも見逃せない。

先にも，Pater が比較的若い頃に書いた論文に改訂の跡が多いと云うことを指摘したわけだが，このことを裏付ける興味深い資料を次に掲げて本節を閉じたいと思う。これは *The Renaissance* の初版が公にされた時に *Fortnightly Review* に掲載された書評の一節である。

"In one or two places there is perhaps to be noticed a tinge of obscurity, or at least of doubtfulness of meaning, the result of a refining of thought into excess of tenuity.……(中略)……This fault, however, in Mr. Pater's case, if it is really there, and nor merely a fancy of my own, is only to be found in the essay on Winckelmann, which is the earliest of the compositions in the volume; and so we may suppose that it is a fault of which the writer has already cured himself." (6)

参 考 文 献

(1) T.S. Eliot *Arnold and Pater* (研究社版) p. 218.
(2) W. Pater *The Renaissance* (1 st Edition) p. 210.
(3) W. Pater *The Renaissance* (3 rd Edition) p. 236.
(4) W. Pater *The Renaissance* (1 st Edition) p. 193.
(5) W. Pater *The Renaissance* (2 nd Edition) p. 212.
(6) *The Fortnightly Review* 1873 April p. 473.
なお，Editor と云う signature があるが．これはおそらく John Morley と思われる。

§ 5. 結　　論

§ 2 でふれた stylistique comparée の内容について，Guiraud は次の如く具体的な

解説を与えている。即ち「Victor Hugo の文体を規定することは，その言語を，他の詩人，彼の同時代の人々のそれと比較することであり，……（中略）……比較文体論を考えることができる。そして，その主たる目標は源泉と影響の研究である。」[1]

これは今後の文体論の方向とその可能性を示したものである。ここでは Guiraud の主張通りに展開することはできなかったが，源泉と影響の一端を辿った。その結果，Pater に与えたフランス語の影響が時の進行と共に増大してゆくことを知った。また一方では Pater が思想内容，言語素材の両面において，諸家の意見を取り入れ，改訂していることもほぼ明瞭になった。そして，これらの成果については，各論文の初出雑誌，及び三版との対比によって，更に明確な結論を得るに至ると思う。

参 考 文 献

（1） Pierre Guiraud *La Stylistique* p. 103.